

第2章 札幌の景観特性

第2章 札幌の景観特性



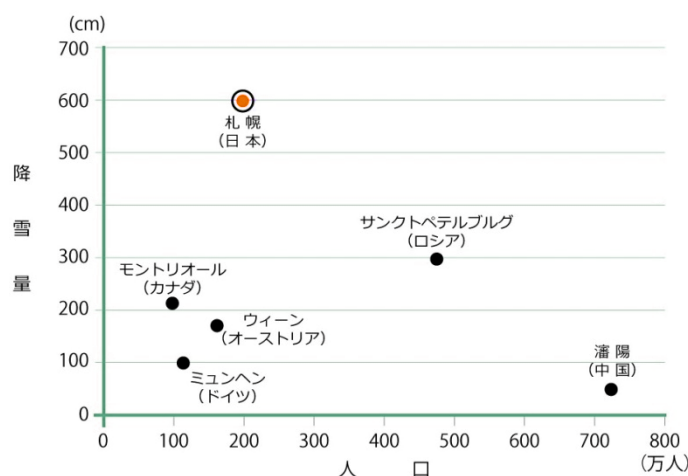
景観形成の理念・目標やその実現に向けた取組等を定める前提として、札幌の景観特性について「自然」、「都市」、「人（暮らし）」の3つの観点から整理します。

2-1 自然

(1) 位置と気候

石狩平野の南西部に位置する札幌は、緯度が高く亜寒帯に属していることから、夏はさわやかで過ごしやすく、冬は積雪寒冷であるのが特徴で、四季の変化が鮮明です。

特に、100万人以上の人口を擁する世界の大都市の中で、年間6mもの降雪量がある都市は他にありません。



※札幌の降雪量は昭和56年から平成22年までの平均。
他の都市は昭和60年から平成2年までの平均

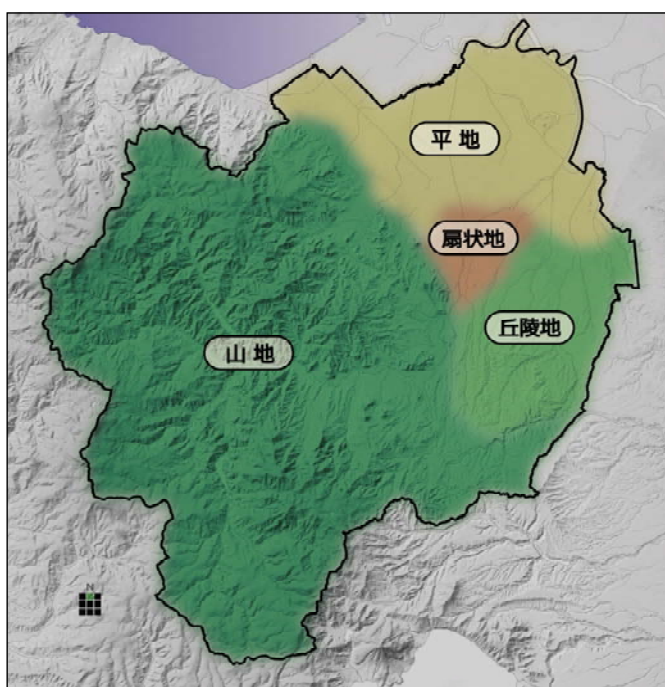
世界の都市の人口と降雪量

<資料>札幌市「札幌市まちづくり戦略ビジョン」

(2) 地形

地形は、都市の成り立ちや、景観の土台となっているものです。

札幌の地形は、南西の山地から丘陵地、扇状地、平地へと連続しています。



地形概念図

【山地】

地域の約6割は南西部に広がる山地です。山地のほとんどは国有林ですが、定山溪や芸術の森など山林に囲まれた特徴的な景観も点在しています。こうした豊かな自然と市街地が近接していることが、札幌の景観を特徴付けており、このことは市民にも広く認知されています。

また、山地のうち市街地と接する山麓は、ひな壇状の街並みや坂などが特徴的です。周辺の山並みのスカイライン^{※5}や近接する市街地の街並みと一体となり、印象的な眺望を形成しています。

【丘陵地】

東部の丘陵地では、河川ごとに波状の起伏があり、坂や崖などが多く存在します。また、そこを横断する道路や、崖線^{※6}の緑が地形を印象付けており、眺望が開けるポイントでは、遠くの山並みや平地を一望することができます。しかし、市街化の進んだ現在では、起伏のある地形を認識できなかつたり、丘陵地からの眺望を確保しにくくなってきています。

【扇状地】

札幌は、山地と丘陵地の間を北部の平地へと流れる豊平川がつくった扇状地の上に発達しました。扇状地では、扇端^{※7}のメム（湧き水）跡が現在もわずかにくぼ地になっていたり、暗渠^{※8}化された小河川が格子状街路に変則性を生み出したりしています。このような微地形^{※9}と大樹が織りなす景観は、札幌の原風景的イメージを想起させる印象的な景観といえます。北海道大学のキャンパスや植物園などでは、現在でもこうした景観が見られます。

【平地】

北部に広がる平地は、水平に広がる田園風景と垂直要素の防風林などが近景、中景をつくり、遠景には手稲山などの山並みが加わり、広がりのある印象的な景観を形成しています。

-
- ※5 **スカイライン** 連続する山並みや建築物などが空を画する輪郭のこと。
 - ※6 **崖線** 長くつながった崖の地形のこと。
 - ※7 **扇端** 扇状地の末端部のこと。
 - ※8 **暗渠** 河川や水路がふたで覆われることなどによって地下化された状態のもの。
 - ※9 **微地形** 山岳、丘陵などの大きな地形に対して、台地のふちや小河川沿いにみられる小さな起伏のある地形のこと。

(3) 植生等

札幌はかつて「エルムの街」とも呼ばれていました。エルムはニレ（ハルニレ）の英名で、肥沃な土と十分な水、そして、水はけの良いところに育つ木で、非常に大きく成長するため、広い空間を必要とします。

北海道大学のキャンパス、北海道大学附属植物園、知事公館、大通公園などに育つ雄大なエルムの姿は、札幌を代表する景観となっています。

このほか、南東部の溶結凝灰岩とその上を覆う火山灰層の地域には、再生力の強いカシワやミズナラが、泥炭層からなる低地には水に強いハンノキが多く見られます。

また、札幌やその周辺では、北海道における野生種のうちほぼ半数の植物が見られるといわれます。このように種類が多いのは、周辺の地形・地質が多様で変化に富んでいること、植物分布において温帯から亜寒帯まで多種多様な種が混在していること、山林の多くが保安林などに指定され、保護されていることなどが主な理由です。

さらに、変化に富んだ地形や地質等を背景として、札幌には多様な生態系が分布しています。これらが生物多様性を支えているとともに、札幌の景観も特徴付けています。

地球温暖化の進行などが植生等に变化をもたらすことや生物多様性が失われることも懸念されますが、札幌の特徴である植生等を生かす視点は今後も重要です。

札幌の主な樹種	
自生している 主な高木	エゾマツ、トドマツ、イチイなどの針葉樹 ハルニレ、カシワ、ハンノキ、ナナカマド、 カツラ、イタヤカエデ、エゾヤマザクラ、 ミズナラ、シラカンバなどの広葉樹
自生している 主な中低木	ツリバナ、ノリウツギ、エゾヤマハギ、 エゾノコリンゴ、エゾニワトコ など
自生している 主なつる類	ツタ、ツルマサカイ、ヤマブドウ、 ツタウルシなど
市街地で見られる 主な外来種	イチヨウ、ニセアカシア、ポプラ、 プラタナス、アカナラ、ライラックなど



市民ホール前のハルニレ

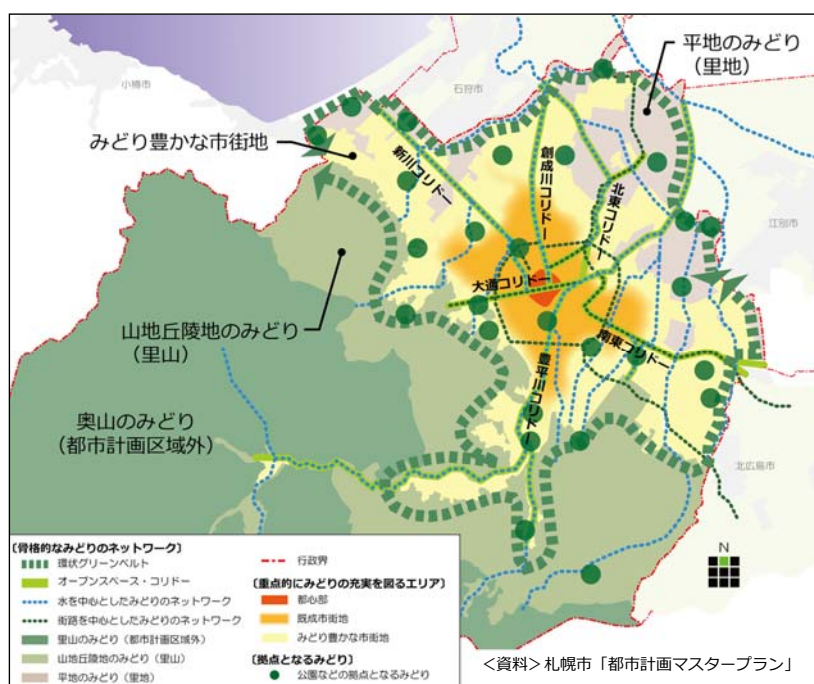
(4) 公園緑地等

札幌市では、これまで骨格となるみどりとして環状グリーンベルト^{※10}やコリドー^{※11}などを位置付け、拠点となる大規模公園の整備を行うとともに、郊外部の新たな住宅地等を中心に、公園緑地を整備するなど、みどりの充実に向けた取組を推進してきました。

その結果、市内における公園緑地の総量は、一定程度充実してきています。しかし、一方で、市街地内及び市街地周辺のみどりの量は決して多くはなく、また、都心部や周辺既成市街地の公園緑地が郊外部に比べて少ないなど、地域ごとの状況の違いも見られます。

また、街路樹等による道路緑化については、ナナカマドやイタヤカエデなど在来種の落葉広葉樹を多く植えているほか、市民の協力を得て植樹帯等に多くの花壇をつくるなど、北国らしい特徴のある景観の形成に取り組んでいます。

なお、札幌市では、平成23年(2011年)に「札幌しみどりの基本計画」を見直し、これまでの緑化推進の基本的考え方を継承しつつ、みどり豊かな札幌のまちづくりを推進しています。



骨格的なみどりのネットワーク

※10 環状グリーンベルト 札幌の自然条件を生かして、市街地をみどりの帯で包み込むもの。

※11 コリドー 市街地を貫通し、都市に潤いをもたらすオープンスペース(公園、広場、河川、農地、建築敷地内の空地など)の軸になることを目指すもの。

(5) 水辺・河川

札幌には、支流を含めると約 400 本の河川が流れています。

開拓期における都市形成の場となった扇状地をつくった豊平川や、都市計画の基軸となった創成川は、都市形成に重要な役割を果たしました。開拓使のまちづくりは、豊平川扇状地特有の豊かな水の恵みを有効に生かして進められました。豊富な伏流水やメムは、工場用水や生活に潤いを与える園池として生かされ、また、創成川、新川という運河は水運の要として利用されました。このように札幌は本来、豊かな水辺環境をもつ都市といえます。しかし、開発とともに扇状地の保水力が落ちて水が枯れ、また、河川が暗渠きよとなるなど、現在の扇状地は豊かな水辺のある地域という印象が薄れてきています。

札幌の水辺風景は、平地を蛇行する川幅の広い河川と葦原あし、丘陵地の谷筋に沿った小河川がいせんと崖線の緑地など、地形との関係で、変化に富んだ特徴が見られます。これらは、それぞれに札幌の水辺のイメージを想起させる地域固有の水辺環境であり、地形と水辺と植生が一体にとらえられる場として、「地域らしさ」や「その場らしさ」を感じさせる貴重な要素となっています。

景観を特徴付ける主要な河川

【豊平川】

南西部の山地から北部の平地へと市街地を貫流する豊平川は、札幌の代表的な河川です。橋を渡るたびに眺められる山並みのスカイラインと街並みのコントラストが、札幌の特徴的な景観の一つとなっています。

【創成川】

創成川は、農業用水や生活用水の供給を目的として開削が行われ、その後、使われ方や流路を変更しながら現在の姿になりました。札幌の東西を分ける基軸であり、歴史的にも大きな意味をもつ河川です。昭和 30 年頃までの河畔は、心地良く散歩したり休んだりできる場所でしたが、高度経済成長に伴う都心部の交通渋滞を解消するため、両側が道路に挟まれ人工的なコンクリート護岸の河川に姿を変えました。

現在では、南 4 条から北 1 条間の両岸は創成川公園として整備され、都心部の中で水辺を感じられる貴重な空間となっています。

【新川】

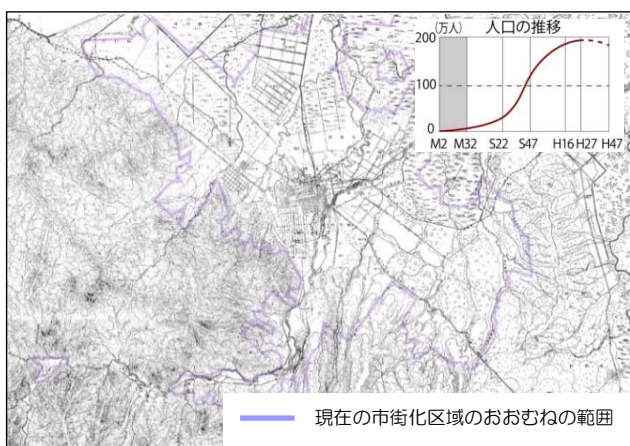
新川は、札幌市北部の湿地帯を農業用地として活用することなどを目的として開削された、都心部から石狩湾に一直線に伸びる河川です。沿線の地域では、住民の声をきっかけとして、平成 12 年（2000 年）に地域住民の手で全長 10.5 km もの桜並木が完成し、特徴的な景観を形成しています。

2-2 都市

(1) これまでの都市づくりと街並みの特徴

① 開拓期の都市づくり 明治2年(1869年)～明治32年(1899年)

北海道開拓の拠点都市として、国による新たな都市づくりが始まりました。



明治29年(1896年)の札幌の市街地
 <資料> (財)日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」

●時代背景

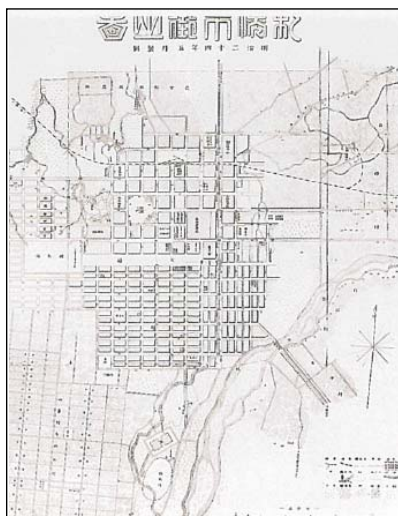
- ・開拓使の設置：明治2年(1869年)
- ・道外からの移住

●都市づくりの主要課題

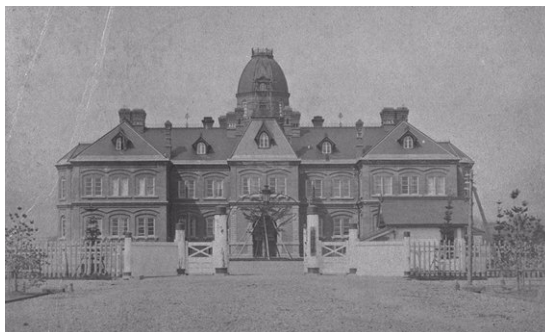
国による北海道開拓の拠点としての骨格づくり

●街並みの特徴

- ・都心部の原型の形成 ⇒ 60間四方の格子状街区
- ・衛星村落の形成 ⇒ 屯田兵村、山鼻村、月寒村など
- ・周辺都市間、村落間を結ぶ道路の形成 ⇒ 現在の国道5号、12号、36号など
- ・れんがや札幌軟石など地場建材の製造 ⇒ 北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)など



札幌市街の地図
 (明治24年(1891年))

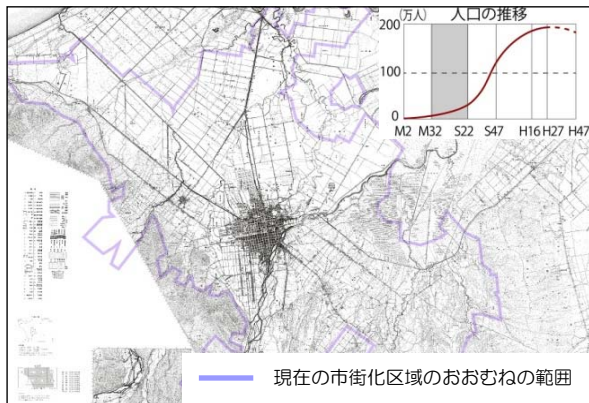


北海道庁庁舎正面
 (明治22年(1889年)頃・北海道大学大学文書館所蔵)

② 戦前の都市づくり 明治32年(1899年)～昭和20年(1945年)

自治の時代に入り、北海道の中心都市へと成長していく中で、この成長を支える公共交通機関などの整備が進みました。

特に旧都市計画法の適用を受けてからは、様々な事業が本格的に実施されてきました。



大正5年(1916年)の札幌の市街地
 <資料> (財) 日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」

●時代背景

- ・北海道区政施行：明治32年(1899年)
- ・軍需による工・鉱業発展
：大正4年(1915年)頃
- ・北海道博覧会による好況
：大正7年(1918年)
- ・市政施行：大正11年(1922年)
- ・人口全道一：昭和15年(1940年)

●都市づくりの主要課題

自治の萌芽と北海道の中心都市への成長を支える基盤づくり

●街並みの特徴

- ・札幌区近郊の宅地化 ⇒ 円山・山鼻など
- ・行政機関、経済機関等の都心部への集中 ⇒ 札幌駅前通の街並みの整備
- ・様々な都市基盤の整備 ⇒ 路面電車運行など



昭和初期の札幌駅前通

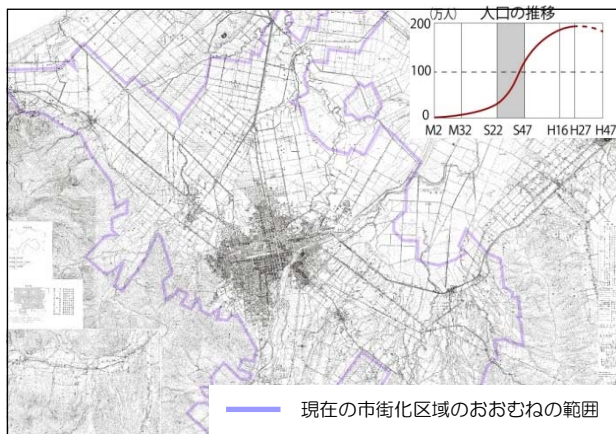


札幌駅前通り俯瞰
 (昭和22年(1947年)頃・北海道大学大学図書館所蔵)

③ 戦後の都市づくり 昭和20年(1945年)～昭和47年(1972年)

人口や産業の集中が急速に進んだこの時代には、これに対応した土地区画整理事業^{※12}などが積極的に実施されました。

中でもオリンピックの招致が決定したことは、地下鉄南北線の開通をはじめ、都市基盤の整備に一層の拍車をかけました。



昭和25年(1950年)の札幌の市街地
<資料> (財) 日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」

●時代背景

- ・本州大企業の中心市街地への進出
 : 昭和25年(1950年)頃～
- ・急激な人口増加
- ・周辺市町村との合併による市域の拡大
 →札幌村、篠路村など
- ・オリンピック招致決定
 : 昭和41年(1966年)

●都市づくりの主要課題

急激な拡大に対応した各種の基盤整備

●街並みの特徴

- ・都心周辺での土地区画整理事業の積極的な実施 ⇒ 東札幌、伏見など
- ・オリンピックを前にした骨格基盤整備と街並みの変貌 ⇒ 地下鉄南北線開通
 (昭和46年(1971年))
 ⇒ 駅前通の市街地改造事業
 ⇒ 競技場や選手村の整備
- ・都心部における新築ビルの増加 ⇒ 建築物の高層化の進展



昭和33年の大通西4付近



札幌市街/北海タイムス社
 (昭和41年(1966年)・北海道大学大学文書館所蔵)

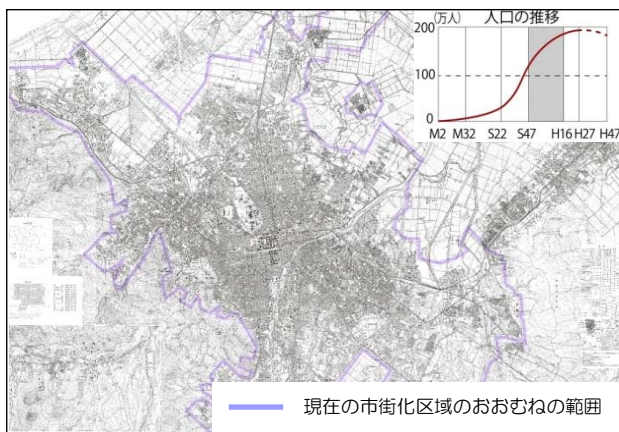
※12 **土地区画整理事業** 道路や公園などの公共施設の整備水準が低く、宅地が不整形で利用効率が低い市街地を面的に整備し、安全で快適な市街地を形成するため、個々の宅地を入れ換え、新しく必要になる道路や公園などを造る事業。

④ 政令指定都市移行後の都市づくり

昭和47年(1972年)～平成16年(2004年)

人口や産業が集中する都市化の進展が続く中、新たな都市計画制度を運用し、計画的な市街地の整備・拡大を進めました。

とくに市街地の郊外部には、この時代に入って計画的に整備された戸建住宅主体の街並みが広がっています。



昭和50年(1975年)の札幌の市街地
 <資料> (財) 日本地図センター「地図で見る札幌の変遷」

●時代背景

- ・オリンピック開催：昭和47年(1972年)
- ・政令指定都市への移行
：昭和47年(1972年)
- ・人口増加の持続

●都市づくりの主要課題

市街地拡大の計画的コントロール

●街並みの特徴

- ・都心部における街並み形成の誘導の開始 ⇒ 都市景観形成地区の指定
大通地区(昭和63年(1988年))
- ・郊外部における計画的な宅地開発 ⇒ 郊外住宅地のゆとりある街並みの形成



郊外の住宅地(真栄地区)

⑤ 都市計画マスタープラン(平成16年)策定後の都市づくり

平成16年(2004年)～

平成16年(2004年)に前都市計画マスタープランを策定してからは、ゆるやかに増加していた人口を当時の市街化区域内に誘導しており、新たな市街地を整備するための市街化区域の拡大は行っていません。

また、平成18年(2006年)には、秩序ある街並み形成を図るため、建築物の高さの最高限度を定めた高度地区を、市内のほぼ全域に決めました。

さらに、市街地内の充実、特に地域の特性を踏まえたまちづくりを進めるため、地域ごとのまちづくり計画策定や再開発の事業化に向けた取組も順次進めてきました。

【篠路】

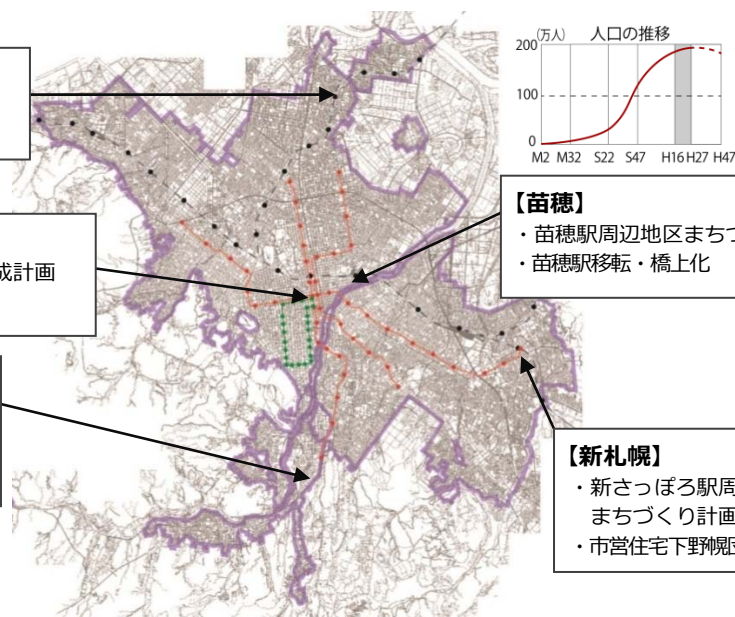
- ・篠路駅周辺地区まちづくり実施計画

【都心のまちづくり】

- ・緑を感じる都心の街並み形成計画
- ・都心まちづくり戦略

【真駒内】

- ・真駒内駅前地区まちづくり指針
- ・旧真駒内緑小学校の活用



平成27年(2015年)の札幌の市街地
 <資料>札幌市

●街並みの特徴

- ・都心部における都市再生の取組 ⇒ 札幌駅前通地下歩行空間の整備と沿道の再開発 創成川公園の整備など
- ・既成市街地における秩序ある街並み形成の誘導 ⇒ 市内のほぼ全域への高度地区の指定
- ・路面電車に関する整備の推進 ⇒ 路面電車のループ化など



創成川公園

また、地下鉄、JR、路面電車といった軌道系交通機関は、都市活動を支える重要な交通基盤としての役割を果たすとともに、地域ごとの景観を特徴付ける要素にもなっています。

【地下鉄】

地下鉄は、軌道等が基本的に地下にあるため景観へ与える影響は大きくはありませんが、地下鉄駅周辺の景観には、人の往来が多く、活気が感じられるなどといった特徴があります。

また、南北線の南平岸駅以南に連続する高架部のシェルターは、真駒内までの景観に特徴を与えています。

【JR】

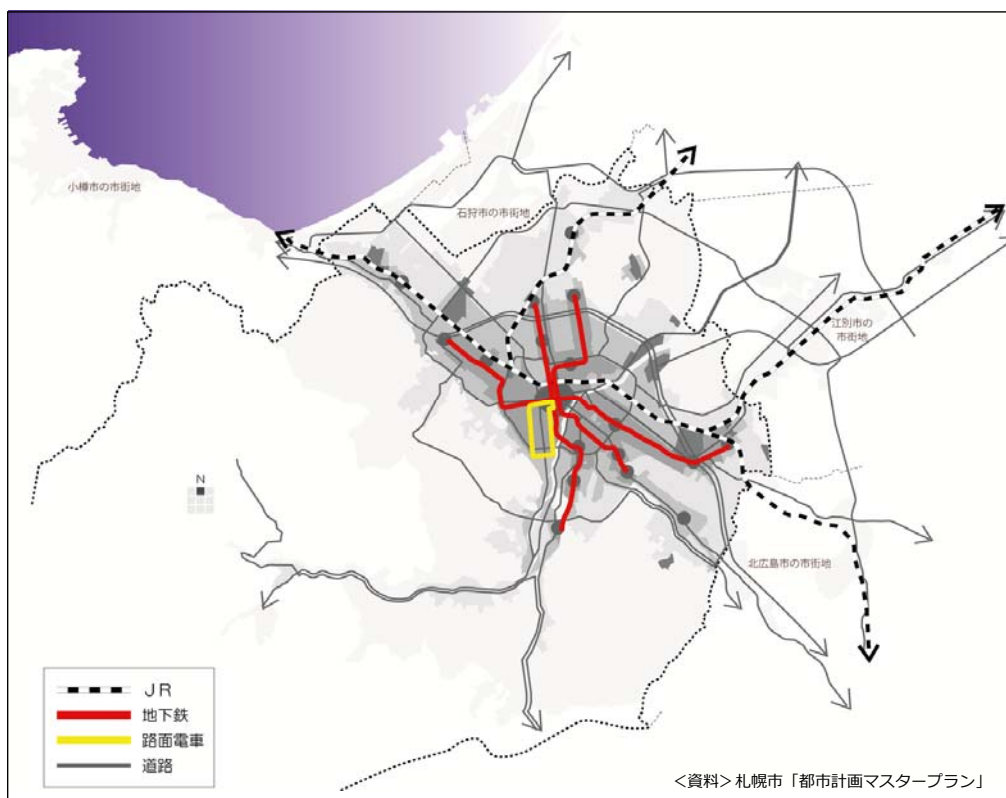
JRは、軌道の一部が高架化されるなど、区間ごとに景観に変化を与えています。

また、札幌駅には、市民はもとより多くの観光客等も訪れるため、札幌駅に向かう車窓から見える風景は札幌のイメージを印象付ける景観であるといえます。

【路面電車】

街の中を路面電車が走る風景は札幌の特徴的な景観の一つです。

また、路面電車の軌道のループ化は、札幌駅前通の景観に新たな特色をもたらしました。



公共交通ネットワーク

2-3 人（暮らし）

ここでは、人（暮らし）の観点からの特性を「札幌の歴史と人の気質」、「文化・ライフスタイル」、「都市機能・産業」の区分で整理します。

景観は、都市の歴史の中で培われた生活や文化を背景に形づくられているものであり、札幌ならではの歴史や文化・産業の積み重ねが札幌の景観に個性を与えています。

（1）札幌の歴史と人の気質

札幌は、北の大地に、自然の恵みと共に暮らしてきた人たちと、日本各地から移り住んできた人たちが、それぞれの伝統と文化を紡ぎ、育みながら、外国の先進の英知も取り入れて、文化の薫る国際都市へと飛躍的な発展を遂げてきました。この歴史が、多様な文化を受け入れる寛容な気質と、既存の価値観にとらわれず、常に新しい物を取り入れ、新しい事に挑戦していく進取の気風を育んだといわれています。

こうした歴史や人の気質を背景として、例えば、札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）ではアイヌの文化を象徴する空間が整備されています。

（2）文化・ライフスタイル

【冬の暮らし】

札幌では、市民が雪や寒さを活用しながら冬の生活を楽しむことができます。また、冬季オリンピックが開催されたこともあり、札幌には、ジャンプ競技場をはじめとするウィンタースポーツ施設が充実しており、オリンピック選手を多く輩出しています。さらには、小中学校の授業でスキーが行われるなど、子どもから大人までウィンタースポーツに親しむ文化が定着しています。



さっぽろ雪まつり（つどいむ会場）



大倉山ジャンプ競技場

【四季折々のイベント】

札幌では、年間を通じて多彩なイベントが開催されています。初夏の訪れを告げる「YOSAKOI ソーラン祭り」、開放的な雰囲気です夏を楽しむ「さっぽろ大通ビアガーデン」、北海道の食を一度に楽しめる「さっぽろオータムフェスト」、幻想的な雰囲気に包まれる「さっぽろホワイトイルミネーション」、そして世界中から多くの観光客が集まる「さっぽろ雪まつり」など、四季折々のイベントが市民や観光客を楽しませてくれます。



さっぽろ大通ビアガーデン



さっぽろ雪まつり

【文化芸術・スポーツ】

札幌芸術の森や札幌コンサートホール Kitara、モエレ沼公園をはじめとした文化芸術施設が整備され、国際的な文化芸術に触れることができるほか、札幌ドームなどの大規模なスポーツ施設も集積し、野球やサッカーなど、様々なプロスポーツを観戦することができます。また、市民が身近に文化芸術・スポーツに親しめる環境も整っています。



札幌コンサートホール Kitara



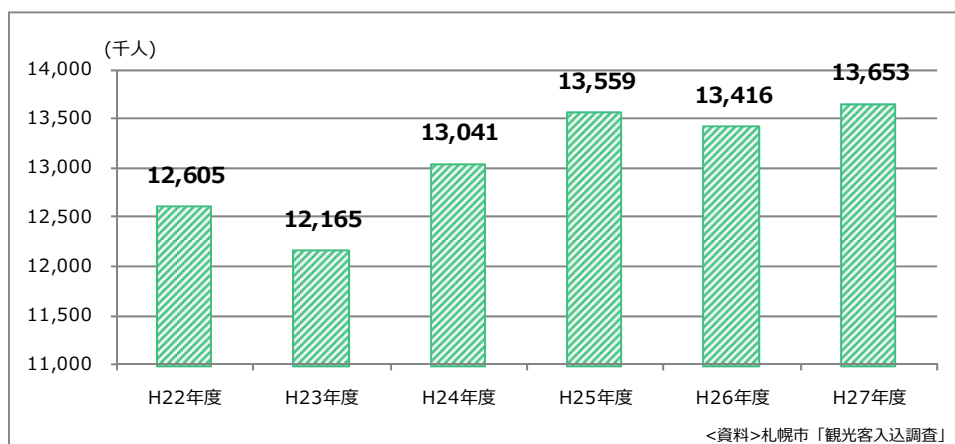
札幌ドーム
(出典：株式会社札幌ドーム)

(3) 都市機能・産業

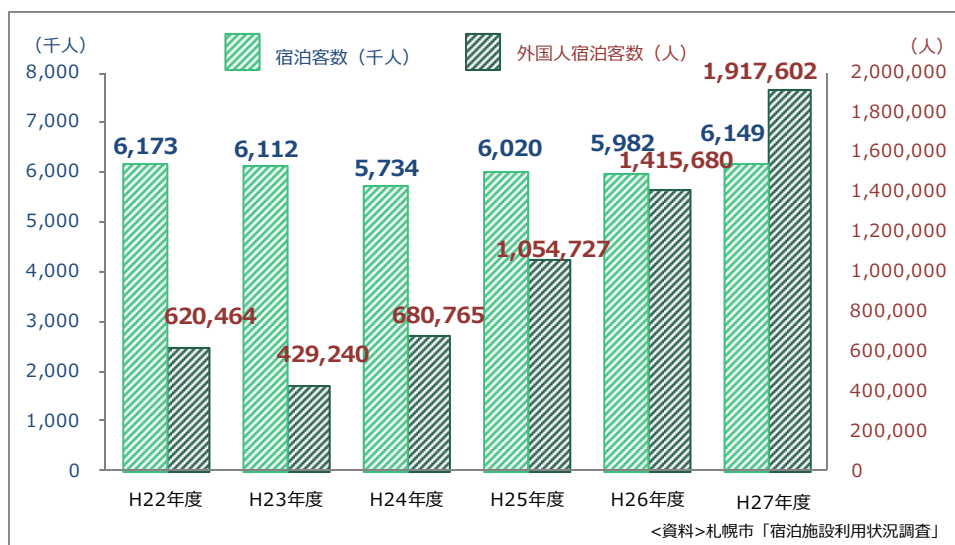
札幌には、北海道庁や国の出先機関などの行政機関が集積しているほか、北海道内の約3割の事業所があり、企業の本社や支社も多数立地しています。また、金融機関、テレビ・ラジオ局、新聞・雑誌社なども集積し、北海道の中心的な役割を果たしています。

このような機能集積によって、ヒト、モノ、情報が集まり、札幌・北海道の魅力を発信しています。

また、産業としては、卸売業・小売業や飲食店・宿泊業などの第3次産業が中心であり、中でも観光は重要な柱の一つです。近年では年間約1,300万人の観光客が訪れており、特に、平成27年度においては外国人宿泊者数が過去最多となりました。



観光客数の推移



宿泊客・外国人宿泊客数の推移